

「Gastrointestinal Pathology and Its Clinical Implications」

Klaus J. Lewin, Robert H. Riddell, Wilfred M. Weinstein 著

東京医科歯科大学教授・第1病理

中 村 恭 一

本書は、消化管疾患を取り扱う内科医、外科医、病理医を対象とした、全2巻(A4版、1,488ページ)にわたる消化管病理学専門の教科書である。食道から大腸にいたる消化管のあらゆる疾患が、病理診断学だけではなく臨床サイドにおける病態像や問題点をも加味しながら集学的に解説されている。

第1巻では生検や手術材料の取り扱いや、その解析法について詳細な記載があり、次に消化管全般にわたる疾患を取り上げながら消化管疾患の総論的内容が説明されている。各論としては、食道・胃十二指腸が第1巻に、小腸・大腸が第2巻にそれぞれ豊富なカラー写真を提示しながら詳細に記載されている。全体構成としては一般的でかつ妥当である。

各項目ごとに疾患の病態像を理解

するための解剖・生理学的な基礎知識の説明が簡潔に記載されており、またX線像、内視鏡像、マクロ像、組織像、電顕像を多数挿入することにより、疾患の病態像を総合的に理解しうるように配慮されている。したがって、病理医に限らず、消化管生検や手術材料を介して相互に関連する内科医・外科医にとっても、その病理レポートの理解や判断に役立つと共に、病理学的検索を依頼するに当たってその検索事項や要点を記述するのに有用である。また、免疫染色法を含めて各種の特殊染色結果を多数紹介しながら、各疾患の診断の要点や問題点などが多数の引用文献のもとに記載されている。そのようなことから、日常の診療において何らかの疾患に遭遇したとき、その診断と問題点へアプロー

チを行う際に有用な指針を与えてくれる参考書である。

本書は、消化管疾患患者の診断と治療に携わる内科医・外科医・病理医がそれぞれの情報を相互に理解し合って総合的診断を行えるよう意図して作製されたもので、消化管病理学の集学的教科書としてのその特徴と条件をすべて兼ね備えている。ただ、良悪性の境界病変などに関して記載の不十分なところがあり、病理診断における実際的な観点からは少々物足りないところもあるが、胃の項目を除いて全般的には本書の意図する目的は十分達成されている。

●Published by Igaku-Shoin Medical Publishers, Inc., New York, 1992, two-volume set, 1,488 pages, 2,097 full-color photos, 148 black and white photos, 22 line drawings, ¥54,800

医学書院洋書部(☎03-3817-5670~1)